



2020年4月号(No.3)
 公益社団法人 日本山岳会
 The Japanese Alpine Club
 東京都千代田区四番町5-4
<https://www.jac1.or.jp>
 編集担当: 新井 梓

3カ月に一度発行する「山」YOUTH版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部のYOUTH CLUBの取組みなどをご紹介します。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております！

ヤマトモ YOUTH CLUB 青年部部长 / 中谷康司

アコンカグア登頂で見た次の風景

2018年から、海外登山も増えているユースクラブ・青年部。今年2月には、南米の最高峰・アコンカグア(6,962m)への登頂も成功。本稿は、そのパーティリーダーを務めた中谷康司青年部部长によるレポートです。

現在の青年部と海外登山

YOUTH CLUBの青年部において、2020年2月9日～3月3日の日程で南米最高峰アコンカグア(6,962m)への登山を実施した。当初、メンバー候補は4名であったが、紆余曲折の末、松尾みどりさんと2名での出発となった。

2018年度、青年部は20年ぶりとなる海外遠征隊を出すことができた。チャムラン登山隊2018である。宮津洸太郎さん、杉原一樹さん、佐々木優さん(サポート隊員)、3名の努力の結果であった。これとは別に、近年、青年部では海外登山を励行している。前出の遠征と同時期にストック・カンリ(6,132m・インド)、また、2019年にキリマンジャロ(5,895m・タンザニア)、標高は下がるが雪山(3,886m・台湾)もある。また、本会の創立120周年記念事業として実施された日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友好合同登山隊にも参加し、チンボラソ(6,310m・エクアドル)などに登頂した。このような海外登山は、YOUTH CLUBで気軽に海外登山へチャレンジできる素地をつくるため、その候補地の探索や様々なノウハウの蓄積を意図しておこなってきた。今回の企画もその一環である。

実際の登山と拓けた視界

我々はこれまでの流れの中で、次なる課題としてキャンプの設置や荷揚げをテーマに考えた。その上で、さらに標高を上げ、実施の時期を勘案すると、今回の目標は自ずとアコンカグアに定まった。

実際の行程としては、2月10日に現地へ到着し、12日に入山、14日にBC、18日にC1(5,050m)、



アコンカグア登頂の瞬間(2020.2.23)

(著者(左)と松尾みどり会員)。

登山の様子は2人のInstagramでも公開中。IDはnkt2inyc(著者)、meromatsu(松尾会員)

20日にC2(5,500m)へと順調に進み、C3(5,923m)は設けず、23日、C2から直接ノーマルルートでアタックして登頂を果たすことができた。日本では基盤となる行程の他に3つのモデルを作って現地に入ったが、BC以降、新たな情報に合わせて毎日、色々な可能性を試行錯誤し、目的通りに荷揚げやキャンプ前進の経験を積むことも出来た。

印象的な出来事がある。16日、C1への最初の荷揚げをおこない、テントを設営してBCに戻ると、その夜からビエント・ブランコ(白い嵐)に見舞われたのである。BCでは沢山のテントが倒壊し、飛ばされたテントもあった。C1にテントを設営してきたことが悔やまれた。一緒に入山したドイツ人のパーティーにも慰められた。とにかく、テントや荷揚げしたものが無事なのかどうかを確かめなければ次の行程を決められない。休養日とするはずであったが、風が収まった後、私たちはC1を目指した。最後の急斜面、徐々に目に入るキャンプの中に自分たちのテントが立っているのが見た時の歓喜、結局、この登山の中で最大の絶叫ポイントになった(登頂よりも)。そうやって、1つ1つを乗り越えながら、行程のアップデートを繰り返した。

そんなわけで我々なりに手応えもあり、得るも

の多い登山となった。多くの登山者が訪れ、踏み固められたアコンカグアですら、それぞれの行程には苦労がある。これが未踏の地、未踏のルート、未踏の頂であったのなら、それは本当に一步一步、1つ1つの行程が大変なものであるのだらうと想像する。そうした偉業を成し遂げてきた先人たちに対する畏敬の念や、同じ道を辿った登山者への敬意の深まりも、リアリティーを増して感じる事が出来た。また、自分たちには何が足りず、さらに困難なことをするためにはどのようなことが必要なのか、そんな少し先のことについても見えてきたように思う。

海外登山で思うこと

キリマンジャロへ行った時、もっと多くの人を訪れたらいいのに、と思った。大スケールの自然に触れられるし、現地の様々な人々との触れ合いが、いかに自分が固定化された価値観の中で山を登っているのか、あるいは生きていくのかということ自認させてくれる。明らかに装備不足の登山者や、大学生のサマースクールのような団体までがいる。あるいはヘリコプターが次々に具合の悪い人を下山させている姿。日本の感覚ではありえないようにも映ったが、それは価値観の問題で、考えようによってはいいんじゃないかと思えてきた。

アコンカグアは標高も高く、アプローチも長いことから、もう少し敷居が高い。しかし、それでもレンジャーによる厳密な登山者の管理がなされており、使おうと思えば様々なサービスが用意されている。一方で、ガイドを付けない自由や、ロジスティックの選択肢など、どのような登山を嗜好するかで設定はいかようにでも出来る。個人パーティーも多いため、他国の登山者との交流も自然と生まれてくる。そんなことから、若い人たちが色々な経験を積むのにとっても良い場所なのではないかと思えた。

本会は、様々なパイオニアワークを成し遂げてきた経緯があり、当然ながら、それを志向する意識が強いだろう。とても大切な方向性だと思う。アコンカグアの登山は直接それにつながるようなものではない。しかしながら、このような海外登山が頻繁に

行われ、登山の裾野が立体的に広がっていくことによって新たなパイオニアワークにつながっていく可能性もあるのではないだろうか。様々なチャンスによって、若い人たちの能力が何かのベクトルを持った時、色々な可能性が生まれてくるのではないかとと思う。それは個人の豊かさとして花開くかもしれないし、新たな登山行動として次なる目標につながっていくかもしれない。そういった意味で、もっと海外登山へ気楽にトライできるような環境が出来たらよいと思う。YOUTH CLUBも、そういう機会が得られるような場所にしていきたいと考えている。山を中心として人と文化、そして社会が繋がっていけるようなネットワークとして機能させることができれば素晴らしい。(青年部 中谷康司)



前っちの山と酒

近年、物流網が発達し、手軽に各地のお酒が買える為、あえて山の麓の酒屋に寄るなんてことは減っているかもしれません。

しかし、多くの蔵には地元銘柄が存在します。これは地元住民向けの酒で、流通は地元に限られます。また、蔵が小さく地元消費のみで外に出てこない酒もあります。これら地元銘柄は地元の食事に合わせて設計されており、同じ蔵の酒でも都内などで流通しているものと味が異なることがよくあります。

信仰、農漁業、^{そば} 人など山と里は深いつながりがあります。その里で親しまれてきた味を見つけに地元の酒屋や蔵に足を運び地域の風土、味を愉しんでみてはいかがでしょう。



◆おまけ：最近みつけた地元酒と歩いたコース
 銘柄：^{きしょう}喜正 純米酒(野崎酒造・あきる野市戸倉)
 おすすめの呑み方：常温または上燗 45度
 歩いたコース：ハセツネ 30k(日帰り)

(青年部 前川晋也)

お願い

引越しやその他の事情で登山道具が不要になった方は、YOUTH CLUBの共同装備に譲ってください(使用可能なもの)。お申し出は本部事務局まで。折返し連絡いたします。

◎YCの支部紹介◎東海支部 東海学生山岳連盟とは YOUTHの仲間がつながる語らいの場所



東海学連 white@srnf_japokal

東海学生山岳連盟（学連）は、東海地区の大学で山に関わる部活やサークル（ワンダーフォーゲル部やアウトドア研究会など）によって運営されている、学生間の交流を目的とする団体である。YOUTH CLUBの学生部との違いは、その中に山岳部はわずか1校しかないことであろう。ほとんどの大学が夏山の縦走を目標に活動している。現在11大学70名ほどで構成されており、各大学から1名ずつ選出された委員が主体で運営し、月1回支部ルームにて行われるミーティングによって、春秋2回の学連と夏の御在所フェスティバルの運営を主に行っている。

■御在所フェスティバル

三重・滋賀県境にある鈴鹿山脈の御在所岳にて毎年夏に御在所フェスティバルと題して学生の交流イベントを行なっている。御在所岳には藤内小屋という素晴らしい小屋があり、オーナーの方には毎年快くご協力していただいている。

2日間開催し、1日目に小屋への資材の歩荷と岩場での体験クライミングを行い、夜は宴会。2日目にはトレッキング班とクライミング班に分かれ全員で山頂を目指す。全国より学生に限らず広く参加者を募集しているの、気軽に参加してほしい。

■冬山登山を目指す「チーム冬山」が始動

かつて学連は、それぞれの大学で活動している学生同士が知り合いより大きな目標を目指す場所としての役割が強かったのだろう。しかし、近年新たな役割を担っている。自分たちの部活だけでは満足できない、また人数が少なく活動が行えない人が集まり、当会の東海支部や学連のOBを指導者に、よ

りレベルの高い山行を行なうというものである。1年を通して各大学の有志が連携をとり1つの部活のように活動して様々な大学やクラブ間で上級生から下級生へ技術の伝達をしている。

この始まりは平成29年の秋。東海支部長・高橋玲司さんの主導で、学連全体より志望者を募って1つの部活のように冬の間も活動をするということになり、4大学から8名が集まった。3月の笠ヶ岳登頂を目指して10月から活動。目標に対して自分たちに何が足りないのかをメンバーで話し合い、目標までの予定を組むなど、学生同士でも切磋琢磨し、レベルアップしていった。毎週行うミーティングでは山行の計画や反省に主な時間を費やし、その中でも定期的に勉強会やワークショップを行うなどして知識面での向上も図った。

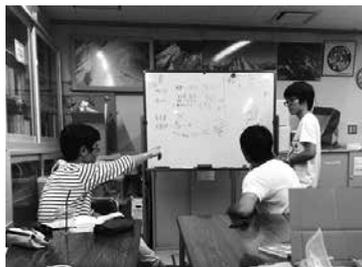
しかし、知識や技術については自分たちだけでは足りない部分が多く、雪上訓練には高橋さんやOBの方に指導していただいたり、当会主催の講習会や国立登山研修所も積極的に利用した。そうして迎えた3月の笠ヶ岳は残念ながら2,450mで敗退という結果だったが、2年たった今でもメンバー同士の交流は続き、心に残るシーズンとなっている。

昨年度は学連の主要メンバーが就職活動や進学などでなかなか登山をすることができなかった。しかし、昨年度も有志の新人4名を迎えて学連OBに頼り活動を行なった。初年度に比べ新人が上級者に教えてもらう形になり主体性に欠けたが、活動を継続することができた。今年度は年末に早月尾根に挑む。チーム冬山も新人3名を加え、再び笠ヶ岳を目標に活動していく。初年度のメンバーが抜ける来年から、どのように継続していくかが課題であるが、学連のOB会を発足することで継続できないかと考えている。

（大同大学4年 澤井丈典）



笠ヶ岳



ミーティング風景



ゴザフェス集合写真

連載 ③ 山道具のメンテナンス



登山用具への心配りは、登山者の心の鏡

ウェア類：透湿防水ジャケット・パンツは環境影響を考慮して強い撥水処理がされていないので、専用の洗剤で洗って撥水処理。ダウンJK・フリースJK・ウールのインナーもそれぞれ専用の洗剤で洗って撥水処理をしておきましょう。なお洗濯方法や保管方法はウェアのタグやメーカーのHPで確認しましょう。ウェア類全般に言えますが、ファスナー部・ほつれなどの不具合や修理は時間がかかるので、シーズン毎に修理依頼をする必要があります。

そして、あまりにくたびれたものは買い替えなどを検討しましょう。雨具などは完全にダメになる前に買い替えて、古いものを日帰りとかやぶ漕ぎ山行に使うなど、使い分ける方が共に長い期間使用できるのでお得です！

登山靴：ゴアインナーを使用していることが多いので、内側の汗汚れなどをゴア用の液体洗剤を活用して、よく洗って、すすいで乾燥させます。革靴・ケミカル素材の靴ともに、塗布する保革油・撥水剤の使い分けがあります。いずれも風通しがよく、直射日光のあたらない場所に保管しましょう。靴箱に入れて保管するのは厳禁です！

山行の一週間前には、一度近所の公園などで小一時間ほど使用して、ミッドソールの部分に亀裂がないか、ソールがはがれていないかよく確認します。この確認作業が、靴と身体のコンドেশョン確認になって安全登山につながります。

最後に、山行毎に靴の汚れを落としていますか？ 汚れは靴の変質を誘うとともに、植物の種子などを生態系の異なる山域に運んで自然破壊につながります。ウェアの不具合は身体の不調を誘って遭難につながります。登山用具への心配りは、登山者の心の鏡と心得ましょう。(東 秀訓)

